

黄昏の地中海

永井荷風

青空文庫

ガスコンの海灣を越えポルトガール葡萄牙の海岸に沿うて東南へと、やがてスペイン西班牙の岸について南にマロツクの陸地と真白なタンヂエーの人家を望み、北には三角形なすジブラルタルのいはやま岩山を見ながら地中海に進み入る時、自分はどうかして自分の乗つて居る此の船が、何かの災難で、こは破れるか沈むかしてくれ、ばよいと祈つた。

さすれば自分は救助船に載せられて、北へも南へも僅かマイル三哩ほどしかない、手に取るやうに見える向の岸にあが上る事が出来やう。心にもなく日本に帰る道すがら自分は今一度ヨーロツパの土を踏む事が出来やう。ヨーロツパも文明の中心からはとほざか遠つて男ははでな着物きて、夜よるの窓下にセレナドを弾き、女はばら薔薇の花を黒髪に

さしあらはなる半身をマンチラに蔽ひ、夜を明して舞まひ戯たはむる、遊
 樂の西班牙を見る事が出来るであらう。

今、ふなばた舷から手にとるやうに望まれる向むかうの山——日に照らされて

土は乾き、樹木は少すくなく、黄ばんだ草のみに蔽はれた山間に白い壁
 塗りの人家がチラ／＼見える、——あの山一ツ越えれば其処すなはは乃
 ちミユツセが歌つたアンダルジヤぢやないか。ビゼーが不朽の音
 樂を作つた「カルメン」の故郷ぢやないか。

目もくらむ衣裳の色彩と熱情湧きほとばしる音楽を愛し、風の
 吹くまゝ氣の行くまゝの恋を思ふ人は、誰れか心をドンジヤンが
 祖国イスパニヤに馳はせぬものがあらう。

熱い日の照るこの国には、恋とは男と女の入り乱れて戯たはむれる事

のみを意味して、北の人の云ふやうに、道德だの、結婚だの、家庭だのと、そんな興のさめる事とは何の関係もないのだ。祭礼まつりの夜よに契ちぎりを結んだ女の色香に飽きたならば、直ちに午過ひるすぎの市場フエリヤに行ゆきて他の女たの手を取り給へ。若し、其の女が人の妻ならば夜の窓にひそんで一挺のマンドリンを弾じつゝ、*Deh, vieni alla fine* *stra, O mio tesoro!* (あはれ。窓にぞ来よ、わが君よ。モザルトのオペラドンジャンの歌)と誘いざなひ給へ。して、事露あらはれなば一振ひとふりの刃やいばに血を見るばかり。情じやうの火花のぱつと燃えては消え失せる一刹いつせ那つなの夢すなはこそ乃ち熱あつき此の国の人生すべの凡すべてあらう。鈴のついた小鼓に、打つ手拍子踏む足拍子の音烈しく、アンダルジヤの少女をとめが両手の指にカスタニエツト打鳴らし、五色ごしきの染そめいろ色いろきらめく

裾すそを蹴く立て、乱れ舞ふ此の国特種の音楽のすさまじさ。嵐の如く
 いよ／＼たけなは酣たけなはにしていよ／＼急激に、聞く人見る人、目も眩くらみ心も
 覆くつががたくる樂まひと舞、忽然として止む時はさながら美しき宝石の、砕け、
 飛び、散つたのを見る時の心地こゝちに等しく、初めてあつと疲れの吐と
 息いきを漏もらすばかり。この国の人生はこの音楽の其の通りであらう：
 ：

然るを船は悠然として、吾わが実現すべからざる欲望には何の関
 係もなく、左右の舷ふなべりに海峡の水を蹴つて、遠く沖合に進み出た。
 突出つきでたジブラルタルの巖壁は、其の背面に落ちる折をりからの夕日の
 光で、燃える焰の中に屹きつりつ立してゐる。其の正面、一帯の水を隔へだ
 てたタンチエーの人家と低く延長したマロツクの山とは薔薇色か

ら紫色にと變つて行つた。

然し、徐々おもむろに黄昏たそがれの光の消え行く頃には其の山も其の岩も

皆遠く西の方水平線かたの下に沈んで了ひ、食事を終つて再び甲板の欄干よに身を倚せた時、自分は茫茫たる大海原の水の色のみ大西洋とは驚く程異ちがつた紺色を呈し、天鷲絨びろうどのやうに滑なめらかに輝いて居るのを認めるばかりであつた。

けれども、この水の色は、山よりも川よりも湖よりも、また更に云はれぬ優しい空想ひきおこを惹起す。此の水の色を見詰めて居ると、太古の文芸がこの水の漂たぐよふ岸辺から発生した歴史から、美しい女に神よしんベヌスが紫の波より産うまれ出いでたと伝うなづふ其れ等の神話までが、如何にも自然で、決して無理でないと首肯うなづかれる。

星が燦き出した。其の光は鋭く其の形は大きくて、象徴

的な絵で見る如く正しく五つの角々があり得るやうに思はれ

る。空は澄んで暗碧の色は飽くまで濃い。水は空と同じ色なが

ら其の境ははつきりと区別されてゐる。凡てが夜でも——月もな

い夜ながら——云ふに云はれず明くて、山一つ見えない空間にも

何処かに正しい秩序と調和の気が通つて居るやうに思はれた。あゝ

端麗な地中海の夜よ。自分は偶然輪郭の極めて明晰な古代

の裸体像を思出した。クラシック芸術の美麗を思出した。ベルサ

イユ庭苑の一斉に刈込まれた樹木の列を思ひ出した。わが作品

も此の如くあれ。夜のやうな漠とした憂愁の影に包まれて、色と

音と薫香との感激をもて一糸を乱さず織りなされた錦欄の帷

の肅然として垂れたるが如くなれと心に念じた。

地中海に入つて確か二日目の晩である。遠く南方に陸地が見えた。北亜フリカのアルジェリイあたりであらう。

食事の後甲板に出ると夕風ぎの海原は波一つなく、その濃い

紺色の水の面は磨き上げた宝石の面のやうに一層の光沢を帯び、

欄干から下をのぞくと自分の顔までが映るかと思はれた——美しい童貞の顔のやうになつて映るかと思はれた。無限の大空には雲

の影一ツない。昼の中は烈しい日の光で飽くまで透明であつた空

の藍色は、薄く薔薇色を帯びてどんよりと朧ろになつた。仏蘭西

で見ると同じやうな蒼い黄昏の微光は甲板上の諸有るものに、

ふなばしご
 船梯子や欄干や船室の壁や種々の綱なぞに優しい神秘の影を
 投げるので、殊に白く塗り立てた短艇にも何か怪しい生命が吹き
 込まれたやうに思はれる。

そよ吹く風は丁度酣なる春の夜の如く爽かに静に、身も溶ける
 やうに暖く、海上の大なる沈静が心を澄ませる。

自分の心は全く空虚になつた。悲しいとも、淋しいとも、嬉し
 いとも、何とも思ふ事が出来ない。唯非常に心持がよくて堪へら
 れない事だけを意識するに止まつてゐる。自分は却て大なる苦痛
 に悩むがやうにどつさり有り合ふ長椅子に身を落し、遠く空のは
 づれに眼を移した。

ゆふべあかる
 夕の明い星は五ツ六ツともう燦き初めて居る。自分はちつと其

の美しい光を見詰めて居ると、何時か云はれぬ詩情が胸の底から湧わき起おこつて来て殆ど押へ切れぬやうな気がする。肺はい腑ふの底から自分はこの暮れ行く地中海の海うなばら原はらに対して、声一杯に美しい歌を唄うたつて見たいと思つた。すると、まだ歌はぬ先から、自分の想像した歌は美しい声となつて、ゆるやかな波のうねりに連れて、遠くくくの空間たゞよに漂たゞよひ消えて行く有様が、もう目に見えるやうな気がする。

自分は長椅子から立上り爽さわやかな風おもてに面を吹かせ、暖あたく静かかな空気を肺臟一ぱいに吸すひこ込み、遠くの星の殊更美しい一ツを見詰めて、さて唇を開いて声を出さうとすると、哀れ心ばかり余りに急せき立つて居た為めか、自分はどう云ふ歌を唄うたふのであつたか、すつか

り選択する事を忘れて居た。歌謡うたは要らない。節ばかりでもよい。

直様すぐさまさう思つて、自分は先づラーラーラー La, La, La ……と声を出して見た

が、其れさへも、どう云ふ節で歌つてよいのか又迷つた。

自分は非常に狼狽して、頻しきりに何か覚えて居る節をば記憶から搜さが

し出さうと試みた。紫色の波は朗かな自分の声の流ながれで出るのを、

今かくと待つやうに動き、星の光は若い女の眼の如くじれつた

さうに輝いてゐる。

自分は漸くカワレリヤ、ルスチカナの幕開まくあきに淋しい立琴アルプを合あ

方ひかたにして歌ふシチリヤナの一ひとふし節を思付おもひついた。あの節の中うちに

は南伊太利亞みなみイタリヤの燃える情と、又何処となしに孤島の淋しさが含ま

れて居て、声を長く引く調子の其れとなく、日本人の耳には船歌

とも思はれるやうな処がある。航海する今の身の上、此の歌にしくものは有るまいと、自分は非常に勇立いさみたつて、先づ其の第一句を試みやうとしたが、O Lola, bianca come——と云ふ文句ばかりで其の後を忘れて了つた。

あれは、自分がよく知らない伊太利語だから記憶して居ないのも無理はない。トリスタンの幕開まくあき、櫓ほしらの上で船頭の歌ふ歌、此の方が猶なほよく境遇に適して居やう。処が今度は歌の文句ばかりで、唱ふべき必要の節が怪しくなつて居る。いか程歌ひたいと思つても、ヨーロツパの歌は唄うたひにくい。日本に生れた自分は自国の歌を唄ふより仕方がないのか。自分はこの場合の感情——フランスの恋と芸術とを後にして、單調な生活の果てには死のみが待つて

居る東洋の端はづれに旅して行く。其れ等の思ひを遺憾なく云あらひ現はした日本語の歌があるかどうかと考へた。

然し此れは歌ひにくい西洋の歌に失望するよりも更に深い失望を感じねばならぬ。「おしよろ高たかし島」と能よく人が歌ふ。悲しくツふしていゝ節ふしだと賞ほめる。けれども旅と追分おひわけ節と云ふ事のみが僅な關係を持つて居るだけで、ギリシヤの神話を思出す様な地中海の夕暮に對する感情とは余りに不調和ではないか。「竹たけ本もと」や「常磐津ときはず」を初すべめ凡すべての淨瑠璃じやうるりは立派あらに複雑な感激を現して居るけれど、「音楽」から見れば歌曲と云はうよりは樂器を用ゐる朗誦詩とも云ふべく、咄とつ嗟さの感情に訴へるには冷ひやか過やぎる。「哥うた沢たぎ節はづし」は時代のちがつた花柳界くわりうかいの弱かい唧ちちを伝へたに過やぎらず、

「謡曲」は仏教的の悲哀を含むだけ古雅であるだけ二十世紀の汽船とは到底相容れざる処がある。あれは苦舟で艫の音を聞きながら遠くに墨絵のやうな松の岸辺を見る景色でなくてはならぬ。其他には薩摩琵琶歌だの漢詩朗吟なども存在しているが、此れも同じく色彩の極めて単純な日本特有の背景と一致した場合、初歩期の単調が、ある粗朴な悲哀の美感を催させるばかりである。自分は全く絶望した。自分はいか程溢るゝ感激、乱るゝ情緒に悶えても其れを発表すべく其れを訴ふべき音楽を持つて居ない国民であるのだ。かゝる国民かゝる人種が世界の他にあるであらうか。

下の甲板から此の時印度の殖民地へ出稼ぎに行くイギリスの鉄

道工夫が二三人と、香港^{ホンゴン}へ行くとか云ふ身許^{みもと}の知れぬ女とが声を合^{あは}せて歌ふのを聞付けた。滑稽な軽^{けい}佻^{てう}な調子から、それはロンドンの東^{ひがしまち}街^{よせ}の寄席などで歌ふ流行^{はやりうた}唄らしい。音楽としては無論何の価値もないものだけに、聞き澄^{すま}して居るとイギリスの労働者が海を越して遠く熱帯の地に出稼ぎに行く心持が、汚^{きたな}い三等室や薄暗い甲板の有様と釣^{つりあ}合^あつて非常に能^よく表現されて居る。

幸福な国民ではないか。イギリスの文明は下層の労働者にまで淋^たしい旅愁^たを託^{たく}するに適すべき一種の音楽を与へた。明治の文明それは吾^{われ}々^くに限り知られぬ煩悶^{いざな}を誘^いつたばかりで、それを訴^こふべく託^こすべき何物をも与へなかつた。吾等が心情は已に古物^{こぶつ}となつた封建時代の音楽に取り纏^すがらうには余りに遠く掛け離れてし

まつたし、と云つて逸散いつさんに歐洲の音楽おんがくに赴おもむかんとすれば、吾等
は如何なる偏頗へんぱの愛好心を以てするも猶風土人情の止やみがたき差
別を感ずるであらう。

吾等は哀れむべき国民である。国土を失つたポーランドの民よ。
自由を持たぬロシア人よ。諸君は猶シなほヨーロッパとチャイコウスキ
ーを有してゐるではないか。

夜の進むよるにつれて水は黒く輝き空は次第に不思議な光沢を帯び
て、恐ろしく底深く見え、星の光あかるの明く数多い事は又驚くばかり
である。神秘なる北アフリカに近い地中海の空よ。イギリスの工こ
夫うぶが歌うたふ唄うたは物哀れに此の神秘の空に消えて行く。

歌へ。歌へ。幸福なる彼等。

自分は星斗せいとう賑ぎはしき空をば遠く仰うぎながら、心の中うちには今日より
 して四十幾日、長いく船路ふなぢの果よこたに横おそろはる恐おそしい島嶼しまの事おもひを思
 浮うかべた。自分はどうしてむむざざくく巴里パリを去ることが出来たので
 あらう。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆56 海」作品社

1987（昭和62）年6月25日第1刷発行

1999（平成11）年8月25日第10刷発行

底本の親本：「荷風全集 第三卷」岩波書店

1963（昭和38）年8月発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年12月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

黄昏の地中海

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>